



Title	自律と自治のための/としての「こどもの哲学」：メキシコにおける「こどものための哲学」国際会議に参加して
Author(s)	高橋, 綾
Citation	臨床哲学. 2009, 10, p. 97-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自律と自治のための／としての「こどもの哲学」

—— メキシコにおける「こどものための哲学」国際会議に参加して

高橋 綾

“La autonomía es una arma más fuerte que el antiimperatismo.” Michel Hardt

自律性は反帝国主義よりも強力な武器だ。 マイケル・ハート¹

● はじめに

メキシコの南東部、チアパス州にサンクリストバル・デ・ラス・カサスという街がある。その名が示す通り、スペインの入植後にできたコロニアル都市である。端から端まで歩いても一時間ほどの広さの街の中心部では、中南米の街によく見られる低層の箱形の建物が連なる町並みのなかに、コロニアルの名残の石畳の道が続く。目に映るもの、匂い、聞こえる音や言語、湿度や温度や光の感触など、異国に足を踏み入れた瞬間にさまざまな身体感覚が刺激され、一度に活性化する経験はなにものにもかえがたい旅の喜びの一つであるが、高地特有の澄んだ空にピンクや黄色、白やグリーン、水色、紫などに塗られた建物が立ち並び、陰ることのない太陽の光とそれがつくり出すくっきりとした陰影が刻まれるこの地では、特に視覚の驚きが強烈な印象を残す。それと同時に目に入ってくるのは、街を行きかう様々な民族衣装をまとった先住民の姿である。

メキシコのなかでもチアパス州は貧困問題が最も深刻だと言われる。この地で異なる民族ごとにコミュニティを作って暮らす先住民族たちは、農業や手工芸等で生計を立てており、非常に質素な暮らしをしている。街には、そういった周辺の先住民族の村から人々が品物を売りにやってくる。こどもも例外ではなく、お菓子や手作りのネックレス、リストバンドをたくさん持って人々の間を駆け回っている小さな商売人の姿が広場や繁華街には目立つ。

アメリカのIAPCから、2009年の年明けにこのサンクリストバルで「こどものための

哲学 (P4C)」²の国際会議があるという知らせがあった時点では、「なぜそんな辺鄙な場所で」と疑問に思ったほどであったが、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアと P4C の実践を調査してきて、中南米やアジアなど英語圏以外の場所でどのような実践が行われているか興味をもっていただければともかく行ってみることにした。

調べてみると、このメキシコでの P4C の国際学会は毎年この街で開かれており、今年 は El Niño Como Crítico Social (社会批判としてのこども) というテーマで、環境問題、グローバリゼーションをどのようにこどもたちと考えるかが中心に話し合われるようだった。さらにチアパス州は、1994 年にメキシコ政府の NAFTA 条約締結に反対して立ち上がったサパティスタ民族解放軍 (Ejército Zapatista de Liberación Nacional : EZLN) の本拠地であり、近年注目されているオルターグローバリゼーション運動の一つの発信地であることもわかってきた。「こどものための哲学」や今回の会議と、『帝国』の著者たちも言及するサパティスタの運動がどのような関係があるのかはわからなかったが、その関連を匂わせるテーマや土地性にも惹かれ、元旦に出国したわれわれはサンクリストバルの街に二日かけてようやくたどり着いた。

● 会議の内容

会議は 2009 年 1 月 3 日から 1 月 11 日までのほぼ一週間、サンクリストバルの街の郊外にある文化施設にて行われた。1 月 3 日には、先住民族の博物館 Na Bolom にてレセプションパーティが行われ、ここで初めて会議の主催者である Eugenio Echeverría と対面した。彼は、現地で CELAFIN (Centro Latin Americano de Filosofía para Niños こどものための哲学ラテンアメリカセンター) を中心となって運営している人物であり、哲学の学位を取ったのち、大学には属さず P4C の普及・教育を行っている。

会議の参加者は 30 名ほど、主にメキシコ国内から、小中学校の先生、学校のカリキュラム作りの責任者や、教育、哲学関係の研究者が参加している。その他に、カナダ、スイスやイギリスからも、スペイン語を話せる実践家や研究者が 5、6 人来ていた。国外から来ている人や大学関係者などは、英語やフランス語も堪能であることが徐々にわかり安心した。ほかに、IAPC からリップマンの次に P4C に長くとりくんでいる Ann Sharp が来ていた。Ann は高齢のため、会議の全ての時間に参加することはなかったが、現地に別荘をもっており、毎年会議に顔を出し、CELAFIN の精神的支柱となっているようだった。

1/4 : Ann Sharp のレクチャーと Digna Rabia フェスティバル訪問

翌1月4日から本格的に会議が始まった。午前中がレクチャーや発表、午後は参加型のワークショップがあり、午前のレクチャーは英語で同時通訳がついた。午後のワークショップはスペイン語なのでついていけないかと思われたが、参加者のなかに英語が話せる人が何人かおり、彼らが助けてくれ、英語のグループを作ったり通訳をしてくれたので、どの時間も取り残されることはなかった。欧米の英語中心の会議とは異なり、すべての人が会議の主要言語に堪能であるわけではないという状況（それは先住民族の多いチアパスの言語環境にも通じるのだろう）のため、言葉を理解できない人に対して、主催者や多くの参加者がサポーティブであったので、これまで参加した国際会議よりも参加しやすい印象を受けた。

4日は、Ann Sharp の講演から会議が始まった。Ann は、マーサ・ヌスバウムやアマルティア・センなどに言及しながら、こどもには、精神的だけでなく身体的統一感や性的志向にも配慮され、尊厳を持った存在として平等に扱われる権利があり、そうした環境の中で、自



写真1：会議の様子、中央に立っているのが Ann Sharp

尊心を持ち、自己表現の力、考える力を養っていくことが重要であると述べた。IAPCの研究は授業方法や評価についての研究など教育学的なアプローチが多いと思っていたので、Ann がこどもの権利についてフェミニズムや人間開発などの観点から意見を述べたことは新鮮に感じられた。

午後はカナダでP4Cを実践している Gilbert Talbot の主導で、対話の素材としての物語づくりのワークショップがあったが、実は筆者はこのグループワークにはあまり集中できていなかった。それは、午後のセッションの冒頭に Eugenio から、夕方の最後のセッシ

ョンは予定を変更して、Digna Ravia（尊厳ある怒り）というフェスティバルに参加することにしないかという提案があったためである。この Digna Ravia は、先に述べたサパティスタ運動の 25 周年を記念して開催される国際的なフェスティバルであり、Eugenio によれば、「今回の会議の Social Criticos というテーマにも非常に関係があり、興味深い講演もあるので、会議の一環として参加されることをお勧めします」とのことだった。会議の一日目にいきなりサパティスタという名前が飛び出し、会議の一環としてそのフェスティバルへの参加を促されたということに驚いた筆者は、すっかりそちらに気を奪われてしまった。休み時間に Eugenio にフェスティバルの内容を確認し、スペイン語の会話にも耳をそばだてていたところ、マイケル・ハートも来ているらしいという話だったので、Eugenio に「絶対に参加したいから置いて行かないで！」と必死に伝え、連れて行ってもらうことにした。

夕方、Eugenio の年季の入った車で、会議場からさらに郊外へ移動。舗装もされていない真っ暗な道を 10 分くらいガタゴトと進み、フェスティバル会場に到着。車の中で聞いた話によると、この会場はサパティスタによって創設された大学³であるらしい。敷地の中には平屋建て長方形の建物や、円形のロッジのような建物が点在している。やはり照明設備はほとんどなく、建物の中から漏れてくる灯りにたよって、足下の道の様子や、地べたに露天を出しサパティスタ関連のグッズや飲食物を売っている人の様子をかるうじて判別できる程度である。フェスティバルということで、飲食屋台やダンス、バンド演奏などもあるようだった。一番奥の大きな木造の円形の建物がメインの講堂らしく、Eugenio によると、今はそこでセックスワーカーの労働状況や権利についての議論が行われている、とのことだった。会場は超満員で 1000 人くらいの人がいただろうが、中に入れそうにないので、窓から中の様子をのぞいてみたところ、演壇には、サパティスタの特徴である黒い目出し帽をかぶった人が何人も座っていた。サンクリストバル到着の翌日に本物のサパティスタにお目にかかれるとは思っていなかったので、かなり興奮したのだが、落ち着いてよく見てみたところ、EZLN のスポークスマンとして知られるマルコス副司令官も奥のほうでパイプをふかしていた。サパティスタには女性の司令官もたくさんおり、彼女たちも演説を行っていたが、その間中、目出し帽をかぶった子どもがお母さんと思われる女性の首にぶら下がったり、まわりの大人に話しかけたりして、ちょっと退屈気味に遊んでいるのも興味深かった。

全てスペイン語で話されていたので内容はほとんど分からなかったが、ドラッグクイーンのようなメイクをした女性が演説をしている時などには、「セックスワーカーに自由と権利を！」というシュプレヒコールが会場を巻き込んで起っており、その熱気は十分に感じられた。聴衆は先住民系の人



写真2：向かって左側がサバティスタたち、マイクを持って話しているのはセックスワーカーのゲスト

はそれほど多くなく、むしろ白人系の人が多かったように思う。長髪やドレッドヘア、モヒカンなどのヒッピーやパンクスの姿も目立ち、遠くから来て知り合いになったのか、連絡先の交換をしている若者グループもいた。このフェスティバルは一週間ほど続くのだが、当然周囲に宿泊場所などはないので、野外の音楽フェスの感覚で多くの若者たちはあたりにテントを張って野宿をしているようだった。

事情を知っている Eugenio 達とはぐれてしまい、暗闇のなか帰る足が確保できるかどうかという不安や疲労のため、講堂で一回目のセッションが終わった時点でわれわれは帰ることにした。しかし、実はその後のセッションがメインセッションであったようで、そこではマルコス副司令官やマイケル・ハートも話をしたらしいということが後でわかり、非常に悔しい思いをした。

1/6：Terre de la Garza の発表

メキシコ国立自治大学で哲学の教員をしている Tere de la Garza の講演。Terre のレクチャーは、ハーバーマスとベンヤミンを参照しつつ、メキシコという「失われた文明」、「語られない歴史」が存在する土地で、欧米の男性中心的な啓蒙的理性主義とは別の理性のありかたを探ろうとする（コミュニケーション的合理性の）試みと P4C との関係性が示唆

されていた。Terre の発表は内容的に興味深いものであったが、啓蒙的理性とは別のあり方の理性というのが、具体的に、先住民族の多く住む、就学・識字率の低いこの国で、どのような形の実践として可能であるのかを知りたいと思った。

1/8：現地の学校見学とわれわれの発表

午前中、Pequeno sol（小さい太陽）という名前の現地の学校を訪問。この学校は Pre-school と呼ばれる幼稚園から中学校まで一貫制の私立学校であり、私立とは言っても親が出資して運営している一種のコミュニティスクールのようなものらしかった。Eugenio と CELAFIN のメンバー、この学校の先生は協力して、Pre-School から P4C の授業を取り入れている。学校は郊外の山ぎわにあり、起伏のある広い敷地のなかに、円形のロッジのような建物が点在している。それぞれの建物は各学年の専用の教室である。建物の中には、図書スペースや芸術作品の展示スペース、お昼寝用のちいさなテント、P4C 用のじゅうたんコーナーなど、こどもたちのアクティビティにあわせて専用の場所が割り振られてあり、こども部屋を見ているようで楽しかった。

Pre-school のクラス（５歳以下）は 15 人程度、最初に短いお話を先生が読み聞かせ、そのあと「ともだち」についての話し合い。かえると「ともだち」になりたい男の子が、どうやったらかえると友達になれるかということを友人の女の子と話している対話篇で、二人の対話のなかで、「いつも一緒にいたら」「人形とはいつも一緒にいるけどそれってともだちっていえるかな」「人形は話せないのにともだちになれるかな」「かえるは話すことができるかな」など、なにか／誰かを「ともだち」と言えるかどうかの基準、ヒントが示されている。その後は、先生がいろいろな物や人の名前を書いたカードを見せながら、それともだちになれると思うか、その理由を聞いていくという方式での対話がなされた。カードに書かれているのは「お人形」「かえる」「大人」「女の子」「男の子」「犬」「猫」「海」「テレビ」など。先生は物語にならって、「いつも一緒にいたらともだちって言えると思う？」「動物は言葉を話せると思う？」「動物や自然を人間は食べてしまう場合もあるけど、それでも友達になれるかな？」というような疑問をこどもたちに投げかけていたが、全員が一つの問いに集中して答えるという感じではなく、「どうして？」と聞かれてそれぞれが一生懸命自分なりの理由を言う練習、対話のための習慣づけをしている印象だった。

続いて見学した小学校３年生のクラスでは、リップマンの書いた「キオ」という物語を

中心に話し合いをしていたが、盲目の少年キオが自分のおじいさんを助けた鯨が近くにいると感じたというシーンをとりあげて、心の動きを表すいくつかの概念「仮定する」「想像する」「理解する」の意味を分節化するというワークをしていた。



写真3：三年生の対話の風景

していた。先生は「鯨がそこにいると仮定する」「鯨がそこにいると想像する」「鯨がそこにいると理解する」ことの違いは何か、キオが鯨がいると「仮定する」「想像する」「理解する」理由は何か、などを尋ねていた。ワークとしては面白いと思ったが、mental actionを定義し、区別するという課題は、三年生にはちょっと難しいのではないかと一緒に見学した人と話した。

中学校の授業を筆者は見学することができなかったのだが、そこでは学生自身が進行役をし、議論をまとめるということが行われていたとのことだった。この学校での全体のP4Cのプログラムがどのように段階をおって組まれているかは聞きそこねたが、IAPCの教材を使いながら、理由づける、概念を分類する、というような thinking skill を積み重ねていき、最終的には子どもたち自身が議論のテーマを決め、進行をするという方向性があるように見えた。しかしこの方法論はアメリカ的なP4Cとそれほど異なるものではないようにも思われたので、この学校の実践はP4Cの理想的実践例とは言えるかもしれないが、(Terreの発表から想像されるような)メキシコ独自のやり方のようなものは見てとれなかったようにも思う。

1 / 8の午後のセッションでは、高橋と本間に発表の機会が与えられた。”Thinking skill and Thinking Subject ” という題で、日本でわれわれが行っている哲学的対話の実践

(哲学カフェ、こどもの哲学)を紹介し、日本の小学校でこどもたちと対話するとき用いた絵本「ともだちや」や、こどもの反応を挙げつつ、それに対する大人の無理解について話した。後半では、われわれはこうした対話活動によって何を目指しているのか、ということを中心に述べた。哲学的対話の目標として、対話の集団の主体になることを挙げ、ベイトソンとエンゲストロームの学習理論を引きつつ、学習の垂直的階層と学習における主体性の増大に言及した。最後は、哲学的対話の学習は、与えられた問題を効率的に解くことや学校という文脈をこえ、こどもたちが自らで問題を見だし、自分たちで対話を続けていくこと、思考と対話の自律的活動の主体になることに向かうのではないか、という結論で締めくくった。⁴ P 4 C は学校という枠をこえて、子どもたちの自律的な対話活動として広がって行くべきというわれわれの主張は、IAPC の重鎮 Ann にはどういう印象を与えるかなと思いながら話したのだが、Ann はわれわれの発表の趣旨をよく理解してくれ、ベイトソンやエンゲストロームの説明をしているときも、「学習Ⅲは、クラスのなかだけじゃなく、こどもたちが自分たちで対話をしはじめるということよね」「その意味では哲学的対話は社会的な活動であると同時に、自分自身のための学習でもあるわね」と助け舟を出してくれ、他の参加者も発表を理解した上で質問やコメントをしてくれた。

1/9 : Adolfo のプレゼンテーション、ディスカッション

カナダで環境問題や過剰消費 over-consuming について研究、対話活動をしている Adolfo のプレゼンとディスカッション。Adolfo は、最初に消費と環境問題に関するたくさんの写真を提示し、参加者にどれについて話し合いたいかを選ぶように言った。筆者を含む数名の人は、マクドナルドと過剰消費の関連性を批判的にとらえた戯画を選んだ。少数者の意見も聞こうということになり、自然の写真を選んだ人が発言したが、都市から来た人や大学人は、グローバリゼーションと過剰消費の関係を問題にする傾向があるのに対し、原住民のコミュニティから来た参加者は、自然への親しみや畏敬の念、あるいはそういった自然とのつながりがこどもたちの世代で失われていることを問題にしていた傾向があった。特に印象的だったのは、ディスカッションも終わりになって、原住民系の学校で先生をしている Maria さんが「実はマクドナルドって何かわからなかったの」と告白し、筆者も含め自分の街にマクドナルドがあることを当然の前提として話していた多くの参加者を驚かせたことである。

こうした議論を聞いているなかで、過剰消費の問題は先進国では深刻な問題であるが、「消費」という生活形態を前提に考えては不十分なのではないかと筆者は考えた。そうした前提では、メキシコの原住民のように、消費という形態とは別のあり方で生活している人々やそうした生活の可能性を初めから排除した、西洋中心主義的な考えに偏る可能性があり、かつ、消費という与えられた枠のなかで買うか、買わないかという二者択一しか残らない狭い議論になってしまうのではないかと思う。

筆者が大学生を対象に行っている環境倫理の授業でも、グローバリゼーションや貧困の問題について提示した際に、貧困問題は「遠い」問題であり、なんとかするべきだとは思うが何をしたいかわからないというような反応が多かった印象がある。しかし筆者には、こうした受動的な発想こそが、消費社会やグローバリゼーションを押し進めるものへの依存の証ではないかと思われるので、貧困やグローバリゼーションを自分たちの問題として主体的にとらえ直す機会を与えることこそが重要ではないかと感じている。例えば、われわれは消費者であるだけでなく、商品やサービスを自らの労働によって生み出す生産者でもあるのだから、こうした問題を生産と労働の問題として捉えれば、「遠い」問題ではなく、自分がどう働くかという問題として考えることもできるはずである。あるいは、不公正なプロセスで作られた商品やサービスしか手に入れることができないと嘆くだけでなく、(ニューヨークのコミュニティガーデンや critical mass⁵、南米の自主メディア活動⁶、日本の「素人の乱」など、幾多の草の根の活動のように)自分たちの欲しい生活のためのサービスを能動的に創造する主体になることも可能なはずである。そこまでいなくても、「豊かな」国に暮らすわれわれは、物を次から次に買い替えられることができるけれども、そのような生活が本当に自分の望む生活なのかと自分自身に問いかけることがそれらの問題を主体的に捉えることにつながるかもしれない。

環境に関する問題や貧困とグローバリゼーションについて子どもたちが考えること、彼らが Crítico Social の主体となるために重要なことは、それらの問題について正確な知識を持つことや自然と触れ合いに出かけることではなく、また、提示されたから考えるというような受動的な関わりをこえて、それが自分にとってどのような問題であるのかを見いだすことができること、主体的、創造的な関わりができる問題であることに気づけることなのではないかと感じた。

1/10 : Eugenio らのプレゼンテーション、ディスカッション

Eugenio を中心とした CELAFIN のメンバーによるプレゼンのあと、テーマについての共同討議が行われた。特に Eugenio の発表では、彼のラテンアメリカの政治状況に対する見方や、その延長線上でメキシコにおける P4C の方向性をどのように考えているかが理解できた。

Eugenio は、まず P4C の基本的な理念である Critical Thinking、Creative Thinking、Caring Thinking などについてどうとらえているかを説明したあと、彼がそれらをどのようなヴィジョンへ結びつけようとしているかを述べた。Critical thinking に関しては、いわゆる論理的思考だけではなく、状況や文脈に根ざした思考の重要性、基準に基づいて判断し、action へとつながられること、自己批判を含むこと、こどもたちが自分自身にとってよい判断をできるようにすることが指摘された。Creative thinking については、それが直感や感情を伴うものであり、論理的思考よりより広範な活動であるとしつつも、文脈を超えることや自己超越 self-transcendent を含むと言われていた。その後、Social Thinking と Caring Thinking について言及し、(500 年間にわたって先住民の存在を無視してきた、そしてマチスモが支配的な風土のなかで女性を虐げてきたというメキシコの歴史をふまえ) 男女平等やジェンダーコンシャス、多数者の意見と少数者の権利を尊重する公平な判断の重要性が述べられた。そして、こうした力を対話のなかで養成することは、最終的には Social Democracy へとつながるというヴィジョンが示された。Eugenio は、それはアメリカ型の、個人の自由に基づくリベラルデモクラシーではなく、Social justice に基づくラテンアメリカの Social Democracy の実現のために必要であると考えたということをはっきりと述べていた。P4C が、あるいは彼のメキシコにおける対話活動の実践が目指すものは、Social Justice に基づいて判断し、具体的な Social action を起こす人々を養成することである、とも言っていたと思う。

このプレゼンは、今回の会議のテーマの核心をなす、重要な問題提起であったが、Crítico Social や Social action、Social Democracy とはどのようなものであるのかが十分明らかにできなかったこともあって、そうした目標のために P4C はどのような方法で行われるべきなのかというような問題には答えが出なかったように思う。以下では Eugenio の話を筆者なりに補い、Crítico Social や Social action の指しているもの、それらと P4C の関係について、少し考えを述べたいと思う。それにあたっては、Social action や Social

democracy と P4C の関係についてもう少し具体的に知りたいと Eugenio に質問したときに、彼自身、サパティスタの対話の仕方と P4C は似ている点があると述べており、帰国してからあらためてサパティスタについて調べてみて、新しい形の Social action の方法として学ぶところが多かったので、そのことから始めてみたい。

● サパティスタ民族解放軍（EZLN）について

サパティスタ民族解放軍は 1994 年 1 月、メキシコ政府による NAFTA 条約批准に反対し、サンクリストバルの街を占拠した。当時のメキシコは与党 PRI による経済開放政策がとられ、チアパス州の天然資源を海外市場向けの商品にするために先住民の排除が行われていた。こうした自然の商品化や先住民族の搾取に反対して立ち上がったのが、先住民を中心に結成された EZLN である。メキシコの「片隅」におこったこの反乱は、「グローバリゼーションの傲慢と南の貧しい人々の排除との間の結びつき」⁷を明確に示し、グローバリゼーションは不可避であるという当時の悲観的な趨勢を打ち破ったとして、21 世紀のオルタナティブグローバリゼーション運動の先駆けとされている。⁸こうした活動が出現した背景には、近年中南米に見られる反米、反ネオリベ、左傾化の傾向やメキシコ革命やゲバラのようなゲリラ活動、革命運動の歴史が存在するが、むしろ、EZLN の活動・組織形態は、世界各地で生まれつつある新しい形の草の根の市民活動と共有される特徴を有しており、「武装ゲリラ」「革命運動」といった冠よりも、グローバリゼーションに抗する市民活動、新たな Social action として考えるほうが適切であると考ええる。

EZLN が「軍隊」という名称、形態を採用していることによって、「武装ゲリラ」、武力革命による政権の奪取を狙った組織であるという誤解が生じたり、政府によって意図的にそういった報道が流されたこともあったが、彼らは暴力行為を是認しているわけではない。EZLN はテロ襲撃や暗殺、爆弾の使用などは一切行っており、国際法に従って軍事行動を行っている。1994 年の蜂起のあとは、世界の市民社会からの要請に応じる形で対話路線へと活動を変容させたが、その後も強大な政府軍と彼らの法を無視した攻撃に対する先住民の不服従を示し、貫くために武装を続けている。

また、EZLN は民族的なアイデンティティに基づく独立運動でもなければ、「権力」の奪取を狙った革命運動でもない。彼らは、メキシコの一員として先住民族の存在が認められ、その自治が認められるべきであると主張しており、その主張の主な宛先はメキシコ政

府であるが、同様に世界中の市民社会に対しても呼びかけを行っている。彼らが目指するのは、何十もの先住民族がその多様性を保ったまま、メキシコ国内にとどまらず、市民社会の一員として正当な権利を認められることである。そしてそのことは、グローバリゼーションとネオリベリズムのなかで先住民族が収奪や搾取の対象となったり、経済・消費活動中心の生活のしかたを押し付けられるのではなく、自分たちの望むやり方で生活を自律的に営むことが認められることを意味している。マイケル・ハートは、こうした Social action の主体が求めているのは、「今存在しているような形での権力」ではなく、「物事を行う力 potencia、より力強く思考する力、そして回を重ねるごとに強力となっていくような仕方でも闘争する力」であると述べ、それは「社会の自主管理の可能性」という「別の意味での権力」となるだろうと述べている。⁹

「社会の自主管理」、自律と自治はサパティスタのキーワードであり、政府や議会など政治的代表制との交渉を、彼らの度重なる不誠実によって「埒があかない」と判断した EZLN は、2001 年からその活動の方向性を自主統治システムの実現に向け変え、共同体自治のための組織として「善き統治評議会」を発足させて自治コミュニティの形成に力を入れている。教育においても、国からカリキュラムや教師が押し付けられることを拒絶し、彼らは学校を自分たちのコミュニティの望む仕方でも組織し、教員を選出することに決めている。今回われわれが訪れた場所も、そうした自治のための学びの場の一つである。

また、今回サンクリストバルを訪問して実感したのは、サパティスタたちは、そうした自律的な生活のための活動を、ゆるやかに楽しみながら行っているということである。彼らの活動は、今は存在していない理念の実現のために闘う理想主義者や前衛主義者といった悲壮感あふれるシリアスな活動家のイメージとはほど遠い。サパティスタの女性たちは、自治活動の資金を調達するために、サパティスタを象った人形や刺繍作品をちくちくと手縫いでつくり、カメラやパソコンなど不慣れなツールを使って、自分たちの活動を自らで映像に記



写真 4: サパティスタオフィシャルショップにて、女性たちの刺繍に見入る筆者

録し発信する。街の若者たちはステッカーをつくり、壁にスプレーで落書きをしてサパティスタへの支持を表明する。これらのどの活動、どのアウトプットも、物が氾濫する資本主義の市場の中では商品価値を持たない、DIY 的な隙間だらけのゆるいプロダクトである。しかし、それらのプロダクトはそのつたなさゆえにわれわれを打つ。そこには、fine であること、洗練されていることへのあっけらかんとした無頓着と、大資本への依存を断ち切り、自分たちでやること、創造することの重要性に比べれば、プロダクトのクオリティなど取るに足らないことではないかというはっきりとした意思表示が感じられる。自らの生活を自分自身で作り上げることの喜び、そのプロセスこそがサパティスタの活動であり、活動の目標そのものであって、今とは違う生活をする、権力を握ることのような外在的な目標のために、現在を手段として犠牲にしているわけではない。

ここから、こどもや人々が、Crítico Social の主体になるとは何を意味するか、Social action を起こすこととはどういうことか、について考えてみたい。それは、環境保護や動物の権利を守る運動に参加することや、エコバッグを買って使うことだけでもなければ、あるいは、投票をすること、自分たちの代表を議会に送りこむことでもないだろう。Social action として通常思い浮かべられるこれらの行動に欠けているもの、それは、サパティスタ的能動性と創造性である。真の意味での Social action とは、すでに与えられている選択肢（環境保護、消費、代表制）のなかで満足するのではなく、自分たちで、能動的に、新しい選択肢を創造することを意味するのではないか。

そうした意味での Social action はけっして派手な、目立つ活動でなくてもよい。刺繍をすることやビデオで活動を記録すること、ステッカーをつくることさえも、あるいは、そうしたマスの制度にのらない活動こそが Social action なのだといってもよい。みずからの生活の細部を、自律的に、創造的に作り出していくこと、そして「社会的なもの」の領域を新たに創造すること、それこそが新しい Social action の方法論である。

Crítico Social の主体となること、それは、与えられた社会問題を「考えなければならない」と受け入れることや、社会で行われていることにやみくもに異論を唱えることではない。自分たちと社会の関係を見直し、自分の問題でもあると同時に社会の問題でもあるような問題を創りだす、という創造性にこそその真価がかかっているように思われる。社会に対して批判的であることとは、社会の外に立つことではない。それは、社会の一員としての「自己」批判を行うことであろう。ただし、ここでいう「自己」批判とは、リベラリズム的個

人やアイデンティティを共有する集団のような「自己」ではなく、——サパティスタたちが、国家から排除されていると同時に、国家の一員として語るという「遂行的矛盾」（バトラー、ランシエール）をおかしながら、自分たちは自分たちが含まれる新しいメキシコ（自己）の一員になりたいと主張する時のように——「自己」の範囲を創造的に拡張しながら、「自己」のあるべき姿を他の人々とともに問い、考えることを指している。¹⁰

Social action、Crítico Social とは、上記の意味において、自己批判と自己変容の活動である。それはどこまでも自己目的、あるいは自己生産的なものであり、外在的な目標のために動くものではない。こうした活動の主体にとっては、「環境問題についてとりくんでも何も変わらない」「自分にはなにもできない」というような嘆きは問題にならない。Social action や Crítico Social とは「自分が変わることを自分自身が楽しんで行う活動であり、それを外から計るものさしは存在しないからである。

● Crítico Social、Social action とこどもとの哲学的対話

最後に、こどもたちが Crítico Social や Social action の主体になることが以上に述べたことであるとするなら、その実現のために、P4C あるいは（その枠組みをこえてわれわれが実践していくべきこととして）こどもとの哲学的対話活動はどのようなものであるべきかを簡単に書き留めて終わりとしたい。

○こどもを受動的、依存的にさせないこと

自分たちの言葉で、自分の考えや他人の考えに向かい合うことの喜びを、それが自分にとって生の能動的再生産のための力 *potentia* になることを伝えること。¹¹

○どんなにつたないものであれ、こどもの自発的参加と表現の場をつくること

自分たちの思考や対話に対して能動的な関わりができることに比べれば、論理的思考力や成績の向上は二次的な問題にすぎない。こどもの言うことは、大人の口まねであったり、直感的で練られていなかったりすることもあるが、そこからしか対話は始まらないのだから、少しずつ自分たちの考えに向かい合うプロセスを作っていけばよい。対話やこどもたちの活動を、その外にある基準からはからないこと。

○ 思考の技術の習得ではなく、こどもたちが思考や対話の主体へと変容する場をつくること

哲学的思考が、単なる「思考の技術」の習得と区別されうるとすれば、自らの思考や対話を評価する基準をも自らでつくりなおしていくこと、能動的な思考の主体になるという点が重要である。それは、必ずしも技術の積み重ねで得られるものではない、むしろ対話における態度、あるいは主体のあり方の変容が起こることを意味する。

高度な論理的表現ができなくても、自分たちの思考や対話を反省し、評価し、続けていける主体になればよい。思考の技術、過去の哲学者が考えたことへの関わりは全く必要ないということではなく、自分たちの思考や対話にとって、どの技術が、どの思考の蓄積が有効かを自らで考え、選べるようになることが重要である。

○ 思考や対話の場をこどもが自主管理すること、自律的に運営すること

こどもたちとの哲学的対話が目指すものとは、こどもたちが思考や対話の主体になり、自分たちの思考や対話のありかたを自分たちで決め、思考と対話の場を自律的に運営できるようになることである。学びにとって最も重要なことは、与えられることをこなすことではなく、自分達の学びのありかたを決め、学びの場所をつくることに能動的に関わることである。

こどもとの哲学的対話は、こどもを Social action の主体にするための「手段」なのではない。サパティスタが自分たちの生活に向かい合い、それを紡ぎだしていこうとするのと同様、自分や他人の考えに向かい合うこと、ともに考えること、そのプロセスそのものが一つの Social action なのである。それは、思考と対話の、そして生の、自律と自治のための／としての哲学的対話活動である。

注

- 1 「lavaca」によるマイケル・ハートへのインタビュー、廣瀬純訳、『闘争の最小回路』、人文書院、2006、75 頁。
- 2 「こどものための哲学」はアメリカの哲学者マシュー・リップマンによって始められた、こどもの疑問から一緒に考えを深めることを行っていく対話形の実践である。IAPC はリップマンによってモンクレア大学に作られた P4C のセンターであり、このセンターでは P4C の対話のための教材づくり

やカリキュラムの検討が行われている。詳しくは以下の HP を参照のこと。

<http://web.mac.com/tricot/iWeb/pc/A144DC78-4C31-4629-BB56-FBB45AEA4EB0.html>

<http://cehs.montclair.edu/academic/iapc/>

- 3 後に調べたところ、我々が訪れた場所は Centro Indígena de Capacitación Integral (CIDEI) de San Cristóbal de Las Casas と呼ばれる場所であり、原住民のために 1989 年に創設された学びの場であった。Cf.http://www.inmotionmagazine.com/global/rsb_int_eng.html
- 4 発表内容については拙論「対話における哲学的思考の学習—クリティカル・シンキングとエンゲストロームの学習理論より」、『臨床哲学』第 9 号、大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室、2008 を参照されたい。
- 5 Cf. 高祖岩三郎『ニューヨーク列伝 闘う世界民衆の都市空間』、青土社、2006
- 6 Cf. 廣瀬、前掲書
- 7 イグナシオ・ラモネ、湯川順夫訳「マルコス ここは世界の片隅なのか グローバリゼーションをめぐる対話」、現代企画室、2002、28 頁
- 8 サパティスタ運動の背景、経緯については、上にあげたイグナシオ・ラモネ、廣瀬らの著作ほか、マルコスとイボン・ル・ボとの対話「サパティスタの夢」、佐々木真一訳、現代企画室、2005 などが詳しい。
- 9 廣瀬、前掲書、85 頁。
- 10 ここでは Social democracy について考察することができなかったが、それはおそらく Liberal democracy とは別の政治形態、例えば南米のチャベスやモラレス政権のような社会主義よりの政権を意味するのではなく、ランシエールの言うような「不和」の状態において問題になるような民主主義、政治の当事者を、共同体に参与し利益をもたらす者を超えて、「分け前なきものの分け前」にまで拡張することができるかどうかという民主主義への根本的な問いかけに関係しているだろう。Cf. J. ランシエール、松葉、大森、藤江訳、『不和あるいは了解なき了解』、インスクリプト、2005
- 11 ベルギーでは、犯罪をおかした子どもたちや移民、虐待を受けた子どもたちとの哲学的対話を行っている実践者もいる。こうした実践を行っているベルギーのリチャード・アントンが来日した際に話を聞く機会があったが、彼は「どんな環境にあっても、学力がなくても、読み書きができなくても、子どもたちにじっくり接していけば彼らは自分の考えや他人の考えに向かい合い、対話することを楽しむようになる」と言っていた。アントンは、こどもとの哲学的対話を、学校教育の枠内で考えるのではなく、言葉を発したり、それが聞き取られる機会を失った子どもたちが、もう一度自分や他人の考えに向かい合い、社会に参加するための“Social instrument”として考えていると述べていた。